

松下駿三さんが亡くなりました。

会議や集会で自己紹介が回ってくると、「知的障害者を普通高校へ北河内連絡会事務局『その5』（3であったり、4であったり実に適当なのですが）の松下です。」と発言されて、場を和ます軽妙洒脱な言葉遣いを思い出します。

決して「その1」とは言われたいし、「北河内連絡会」創設から16年、いつも裏方に徹して東奔西走会の運営を支えてくださいました。

定例会や学習会の度に会員に案内を送るのですが、私が「案内はがき」の作成を担当し、松下さんがはがき送付先以外の家庭にメールを送信する役割になっていました。どうも話を聞いていると、一軒一軒宛先を選び、案内はがきのデータを添付して送っているようなので、ある時、「グループ送信したら簡単ですよ」と、電話を通して設定をお手伝いしようとしたことがありました。

「いやあ、年寄りには暇だから一人一人送りますから」と、やんわりと断られました。設定の操作が面倒なんだろうかと、松下流を貫く頑固さを想像したものでした。

ところが、会員の方たちから、「松下さんがいつも気にかけてくださるので、今度久しぶりに参加します」とか、「高校で苦しんでいるので、松下さんのメールを観たときに相談させていただこうと連絡を取りました」などの言葉が寄せられてくることに気づきました。

80人以上のメールを一人一人はがきに手書きするように近況を書き添えながら、送られていたことに気づいて頭が下がりました。

「日の丸君が代、不起立裁判」や、「教科書問題」などでも活動され、常に弱者、マイノリティー、被差別、反権力の立場に依拠して活動する闘士でもありました。相手がどんなに大きな力を持っていると、その横暴に対しては微動だにしない意思で立ち向かい、力勝負を挑んだり、時には飄々として体かわしたり、変幻自在の闘い方に何度も感心させられたものでした。

おそらく、その幅広い運動の経歴が、障害者問題に向かわせたのでしょうし、障害当事者に対して、常に裏方に回るのは必然であったのだと思います。

夜の9時ごろ、机に座って普段と変わりなくお連れ合いと話しながら、急にくずおれるように倒れて、救急車で搬送される途中で息絶えられたと聞きました。

その3日前に会議でお会いして、帰りに車に乗せていただき、同乗した友人といっしょに話が弾んで、途中京橋の喫茶店で話し続けたばかりでした。

確か76歳、残された者には悲しみと困惑が尽きませんが、普段と何一つ変わらぬ暮らしの中でフツといのちが消えた極楽往生ではないか、私はそう思っています。

近く、偲ぶ会を計画しています。 合掌



○ 日時： 3月9日（土曜日） 午後1時～4時頃

○ 場所： メセナ ひらかた 6階 大会議室

京阪枚方市駅北口から 徒歩7分 ラポールひらかたに近隣

072 - 843 - 5551 （駐車場あり）